

# 本尊論議變遷史論

吉田素恩

## 下形式論史 儀相論史

天、總論

### 一、議相論議の起因

#### (甲)曼陀羅上の起因

本尊論議變遷史論上、儀相論史とは、吾人が上編に於て略敘せる主幹、即ち曼荼羅の中尊を除き、以外の諸佛菩薩等の座配、筆法、廣略、及び之を繪像、即ち所謂繪曼陀羅に描寫せるもの、並びに木金像等に彫鑄せるもの等に關し、曾て先輩學匠の間にあげつらはれたる、幾多論議を、因果的歴史的に討究し、斯くて以て其の歸着点を發見せむとするもの也。

吾人は既に前編餘論の下に於て、吾祖圖顯の曼荼羅は、一般佛教學者、特に通佛教史家の謂ふが如く其の意匠的思想の淵源、斷じて『觀智儀軌』より發出することなく、教理發展の道程に約し、將た塔外相承の外用に約して、遠く是れが源泉を討ぬれば、寧ろ南岳大師が觀心修行の方便として、十一面觀世音の十面を十界となし、餘の一面を己心とあし、斯くて此の心、本來十界を具すと立て、之れを以て其の觀境と爲せるに存するを説けり。

而して吾が家の曼荼羅は、一般の所說に従へば、文永十年七月八日吾が本化の上首、佐渡いちのさへ一谷に於て始めて之れを顯はし給と云ふ。然り、『正像未有』云々等の銘記此の前年正月九日、興上への授興は、且之れを別す。あるは、此の時を以て最初となし、又『本尊抄』の大著作に次いで顯し給ふが故に、本尊としての體、相、用、其の全

分に涉りて遺憾無く圖出光顯せられたる邊に約せば、方に此の時を以て始原とあす、然れども曼荼羅中『正像未有』乃至日蓮始之云々の『始之』とは、意、正像二千年の間、曾て時の四依たる、迦葉、阿難、乃至天台、傳教等によりて發揮せられず、入末法二百年代に及び、唯本化聖祖によりてのみ、始めて光顯せられたるを示し、決して或る一部の學者の考ふるが如く、『佐渡以前に在つて、曾て圖顯せず、文永十年、方に顯揚せり、故に『始』めて云ふ』との謂には非ざる也。

古來の傳説、及び學者の所説に據れば、吾が祖が始めて墨痕淋漓、末法行者の對境を、楮表に顯出し給ひしは、建宗の翌年四月十六日無光明點一返首題にして、其の最後は入滅の當年八月卅日十界具足白蓮興上に授與し給ひしものは是れ也と云ふ。抑も吾が祖一代、圖顯授與の本尊にして、其眞毫として現存するもの、及び其の未決として現傳するもの、此等を具に枚舉すれば、其の數始んど三四十幅になんかんとすと稱す。

現今の甲州には由井正雪の偽筆、及び神宮寺日進の偽筆多し。然るに、今『本尊鑑』及び其の他二三の信賴すべき『記錄』等により、此等を圖顯の年代に約し、其の様式に約し、具略に約し、銘記に約し、其代表的にして且つ眞筆と斷定せられたるものを通觀するに、其の大体に於て佐前と佐後と同じからず、佐後に於ても、弘安以前と以後と同じからず、弘安以後に於ても、文永と建治と同じからず、文永年中に於ても、所謂始顯曼陀羅と諸餘曼陀羅と同じからず、所、十界の諸尊に悉く『南無』の二字を冠せるものと、唯四聖にのみ南無の二字を冠せるものとの別あり。近來一派の學者は、此の中前者を稱して總歸命式と呼び、後者を稱して四聖歸命式と名け、かくて大凡そ吾が祖是れ一應は適宜の研究なるか如しと雖も、再往は斷じて吾人の依用せざる所也。何んとなれば、斯く範疇的名稱の下に、強いて分類を企つる時は、一見吾が家の曼陀羅には、本來數種あるが如く考へらるれば也。嗚呼闊浮統一、四海同歸の大本尊、その根原や本來獨一豈に數種あるの理あらん、若し夫れ之れを具略様々に圖顯し給ふ所以のものは、化物利生の大慈悲上、また止むなきに基くのみ。而して斯の如き近代の企ては、從來の爭火に更に薪を加へ、その論勢をこて一層熾ならしむるものと云ふべき也。詳しくは後章の如し。

蓋し教理史的、即ち外用相承の一邊に約して之れを云はゞ、佐前に於ける吾が祖が化物利生は、所謂

台家附順、恰も佛陀の爾前の如し。此の故に唯その表面より之れを見る時は、其の本尊の圖顯、全く隨他意、未究竟のものに似たるは勿論也。佐前の圖顯に、大凡そ左の三種あり。即ち

(一) 一返首題無光明点的曼荼羅

(二) 七字の左右に佛菩薩等、又は讃文を記載し給ひたる曼荼羅

(三) 十界具舉、佐後に酷似の曼荼羅

是也。第一、一返首題の曼荼羅とは、前に一言せる建長六年四月十六日圖顯のもの眞偽の論あり之れに屬し第二は伊東配流の際、上原氏即ち船守彌三郎氏へ授與のもの七字光明點にして、其の左右に「病即消」の讃文、並に御署名あり同年揖取氏名は九藏へ授與の世俗に所謂楊枝の曼荼羅七字は草書にして、其の左右に、日月及び同年江川氏即ち豆州荊山の太郎左衛門氏へ授與の有名なる火防の板本尊七字光明點、左右に二佛四天王、及び御署名あり聖主天中天、迦陵頻迦、聲、哀愍衆生者、我等今敬禮の經文を記し、御署名あり並びに文永六年六月四日大國朗師へ授與の曼荼羅光明點首題の左右に、兩尊四士、等之れに屬し第三は文永九年正月九日白蓮興師へ授與の曼荼羅十界具列、佐後等之れに屬す。

次に發迹顯本、佐渡配流以後の化導は、本化別頭、おほ佛陀の八箇年に似たるが故に、其の染筆に於て設ひ具略等の差異これあるも、悉く皆本懷暢達、隨自意になるもの也。先づ弘安以前と以後とを比較するに、概してその差異次の如し。

(一) 座配整不  
諸尊ノ座配殆ド不ニ整頓……………弘安前  
各尊ノ座配多ク得ニ中庸……………弘安後

(二) 迹佛ノ存否  
多クハ善徳及分身佛有リ……………弘安前  
多クハ釋多ノ外餘佛等無シ……………弘安後

- (三) 勸請、過不  
列<sup>スル</sup>ニ各尊<sup>ヲ</sup>多クハ有<sup>リ</sup>過不及<sup>一</sup>……弘安前  
諸尊ノ列數最<sup>ニ</sup>得<sup>ニ</sup>其次<sup>ヲ</sup>……弘安後
- (四) 動染、點異  
二明ノ點多分ハ菩提點<sup>ナリ</sup>……弘安前  
反<sup>シ</sup>前ニ多分ハ如意珠點<sup>ナリ</sup>……弘安後
- (五) 達多、有無  
提婆ノ記載多分ハ無<sup>シ</sup>之……弘安前  
達多ノ勸請大概有<sup>レ</sup>之……弘安後
- (六) 鬼母、位置  
多分ハ位<sup>ニ</sup>首題之直下<sup>ニ</sup>……弘安前  
多クハ反<sup>シ</sup>前ニ與<sup>ニ</sup>十女<sup>ニ</sup>對列<sup>ス</sup>……弘安後
- (七) 署判、位置  
多分ハ無<sup>シ</sup>玄題之直下<sup>ニ</sup>……弘安前  
多分ハ有<sup>リ</sup>玄題之直下<sup>ニ</sup>……弘安後
- (八) 年號、同異  
二千二百二十餘年……弘安前  
二千二百三十餘年……弘安後
- (九) 讚文、有無  
多分ハ有<sup>リ</sup>經文等ノ讚語<sup>一</sup>……弘安前  
多分ハ無<sup>ニ</sup>讚文<sup>ヲ</sup>爲<sup>ニ</sup>特色<sup>ト</sup>……弘安後
- (十四) 天、存略  
四天ノ存略殆<sup>ド</sup>不<sup>ニ</sup>一定<sup>一</sup>……弘安前  
多分ハ安<sup>ニ</sup>置<sup>ス</sup>四大天王<sup>一</sup>……弘安後

以上の外、若干の差異、例せば弘安以前に於ては、四天に冠するに、『東方』『西方』等を用ひ、或は

『大』字を用ひ、或は其の『梵名』を以て表はすと雖も、弘安以後は、大概の場合定んで『大』字のみを用ふる等、又第七署判分別の下に於ても、署名と華押と別處に置く否と、等の相違あれども、今は之を略す。大石寺藏弘安二年國重授興の楠板本尊に就いては、上篇寛師の條下、及び本篇第二期參見。

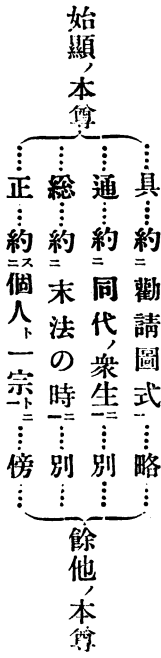
斯くの如く弘安を以て界線となし、其の前後に於ける異点を重要なものに從つて列舉すれば、略して如上の十種あり。此の故に古來或る學者別して身延門流は、弘安以前の諸圖顯を以て未再治、未究竟と立て、獨り弘安以後の曼荼羅のみを稱して再治、究竟とあし、意以て此の兩者の間に勝劣得失の目を説かむとせり。然れども此の企や、穩健の思想を缺くこと最も甚しと云べし。既に略述せるが如き理由に據りて縱令吾が祖の染筆中、多種多様の圖式之れ有るも、其の具略なるに約して、何んぞ未治、再治、勝劣得失の論をなすを得む。況むや『再治』、『未再治』なる用語が、儀相論議史上に顯はるゝに及びしは、康正三年前後のことにして、此の語成立の因由は、如上十種の異相に基く是れ表面と云はむよりは、寧ろ其の萌芽、各山割據、門流的、派別的根性に發す上の起因と云はむ方至當なるに於てをや。此の史實の詳細は本論第一期の下の如し。嗚呼假令大曼荼羅を恭敬すとも、吾が祖の所謂『惡しく敬はゞ』、畢竟是れ墮獄の惡業のみ、吾人苟も本化の末輩たらむ者、豈にこゝろせずして可あらむ哉。

次に文永及び建治御圖顯の異相如何、先づ文永年中の御圖顯に於て二あり、即ち所謂佐渡始顯、及び其の以後の御染筆に係るものは是れ也。佐渡始顯の大曼荼羅とは、文永十年四月二十五日、當身の大事たる『觀心本尊抄』を製作して、本門本尊の内容を活釋し、越えて七月八日、一谷の配處に在つて圖し給へる、十界具足の大圓境を云ふ。古來には、之れを『佐渡始顯本尊』と云ひ、又勸謂の十界各尊に、皆『南無』の二字を冠しある邊に從つて『總歸命大曼荼羅』と稱す。蓋し諸尊に悉く『南無』の二字を冠せるが如きは、諸圖顯中、唯此の一幅に限るが如し、是れ他の本尊と異なる其の一也。又讚文、銘記の外、

別に經の証文あるは、他と異なる其の二也。又其の授與の人無きは、他と異なる其三也。若し夫れ提婆達多の記載之れ無きが如きは、別に甚深の聖意あるか、他日之れを攻ふべし、此の御眞跡は、曾て佐州一谷妙照寺より傳來して身延久遠寺の寶藏に之れありしが、明治八年同山の七堂樓閣とともに惜しいかお祝融氏の奪ふ所とあり、現傳せるは、遠沾享師の拜寫に係るものにして、絹地にして幅は二尺六寸一分 長は五尺八寸二分なり。 豆州玉澤妙法華寺よりの奉納也。

此外文永の圖顯に房州保田妙本寺藏「萬年救護之本尊」あれども、世人知悉の故に、今は之れを畧す。

此外、同じく始顯本尊と稱するものに、一佐渡根本寺藏文永十年四月の所謂『資始曼荼羅』、二京都要法寺藏興師授與の曼荼羅、三相州川合寺藏林近藤に新助授與の曼荼羅、四駿河海長寺藏頂師授與の曼荼羅、五村上國信所藏の曼荼羅等あり。就中最後のものは、智學居士自ら奉寫の上、『維時明治十八年太歲宿乙酉一月十三日就村上國信居士之藏翰眞跡以上右側』虔而奉拜寫茲以備立正安國會布教之本尊者也、執筆金剛道人日謙、判以上左側と傍書し、且つ總歸命本尊に對して、之れを四聖歸命式始顯曼荼羅と稱し尙ほ、



の如き理を以て特に尊重する所のもの、又前の四種に就いては、古來諸家各々説を立て、偏に其の一幅により、互に超勝尊特を骨張すと雖も、本論に入りて述ぶるが如く、其が歴史的証據不充分なれば、今は朝師、潮師、諦師、耆師及び董師等の所説に徴して、且く『總歸命本尊』を以て、眞個の始顯曼荼羅と斷定せむ。

次に此の本尊顯發以後、文永三箇年間の御染筆には、特に取立て、枚舉すべき差違無し。但し上總藻原寺藏、即ち文永十一年七月廿五日、身延山に在つて御圖顯の大曼荼羅<sup>十界</sup>具足は、諸神統一、大千同歸の御理想、遺憾なく活躍し、四天に皆方角を冠らせ、南方増長、西方廣目の位置他と反對し、又天人修羅等の頭に、『無量世界』の語を存し、又天照八幡の上に『大日本國』の四字を冠らしめ、又銘記に『大覺世尊入滅後<sup>中略</sup>大曼陀羅也得意之人察之』とある等、大に他と異なる點あり。

然らば次に建治の本尊とは如何。建治の本尊とは、建治三箇年間の御圖顯を指すものにして、之れを最もよく代表するものは、玉澤經王山藏、全二年四月、昭師へ御授與の所謂『傳法正嫡附法の大曼荼羅』是れ也。

此の本尊の餘他と異なる所は、其の讃文が、右側に壽量品の二節、即ち『是好良藥<sup>云々</sup>』『餘失心者<sup>云々</sup>』と、藥王品の一節、即ち『此經即爲<sup>乃</sup>至不老不死』左側に涅槃經の七子の譬、及び『三極重病<sup>云々</sup>』の一節とを、隨義接文して認め給ふ点、並ひに十二神を加へ、帝釋天王を千眼天王と記し給ふ点等也。

此の外、京都妙顯寺藏、玄旨本尊<sup>建治元年十二月經一丸へ授與</sup>と稱するものは、七字の左右に『今此三界<sup>乃</sup>至能爲救護』の經文を記し給ひ、諸佛諸菩薩等の勸請更に無く、其の様式寧ろ佐前に似たり。

以上は、其の叙述の順序に於て、系統的ならずと雖も、其の大躰に於ては、曼陀羅の時間的豎の分類也。若し空間的横の分類に約せば、その佐前たると佐後たるを問はず、大凡そ吾が祖一代の御圖顯は左に圖示するが如く、或は一般の用語に従つて、廣略要、或は行學朝師の所說に従つて、教行証の三種に分類し得可し。

本尊……………一返首題(諸佛等)尊本……………要証  
……………十界略舉、本尊……………略行

吾が家の曼陀羅には、或は豎に約し、或は横に約して、各種各様、各特色あること斯くの如し。

然れども上編及び前段に於て、既に屢々説けるが如く、本尊は由來唯一體あれば、若し更に數歩を進めて、吾が曼陀羅を讃仰せんか、如上の分別の如きは、蓋し唯相用外面の問題にすぎずして、未だ本体内面の論議に觸れたるものに非ず、『如來秘密神通之力』の本跡、本崇尊豈に二三四五等の數種あるの理あらむや。されば種々に圖顯し給ふと雖も、其の當相に著して、直に多種と認むるが如きは、畢竟吾人凡夫の迷見のみ。従つて古來の學者が、以上の分類に固執し、かくて以て再治、未再治、究竟、未究竟の説を動かさざるが如き所以のものは、唯是れ曼陀羅の皮相にたばれて、其の真隨に達せざるが爲ならずむばあらず。

要するに、曼陀羅上に於ける論議は、之れを抽象的に云へば、(一)如上皮相の執見が、その光明面の動機とあり、(二)宗團分裂、諸山割據の惡流が、その暗黒面の動機となり、而して、一方木像本尊上の論議と相並行、若しくは相關聯し、上下茫々、茲に殆ど七百年後の今日に至りて、尙止まざるもの也。若し夫れ其の具體的歴史上の説明、及木像上の諍因に關しては、説必次第、第二章以下、順次本論に入りて、之れが詳細を委くすべし。